



優秀賞〈銀の星賞〉

『狐とおばあさん』

京都府立北嵯峨高等学校三年 西 部 響

「狐は大切にしろ」

物心ついた頃から、おかあさんが私に口を酸っぱくして言っていた言葉。中三になった今でも、たまに言われることがある。でも、私の住む小さな村で狐なんて今まで見たことないし、友だちもみんなないと言う。それなのにどうして狐を大切にしろと言うのか。それには、私が小さい頃おかあさんが毎晩語り聞かせてくれた昔話が関係している。おかあさんが生まれるよりずっと前からこの村に伝わるお話。今はもう聞かないのではっきりとは覚えていないけれど、あれは確か、優しい狐の話だった。

ある年の春。山に住んでいた狐は、小さな子供と出会った。親とはぐれたとしゃがみ込んで泣いていた男の子は、隣に座った狐にこう言った。

「あのね、僕、おばあちゃんの家遊びに来たの。おかあさんと、おとうさんと、三人で。それでね、一緒にお散歩したら、いつの間にかみんななくなっちゃったの。さっきまで周りは畑とか、田んぼとかだったのに、こんなところまで来ちゃったの。ねえ、狐さん。ここはどこ？ おかあさんたちは、どこにいるのかな？」

泣きじゃくって言葉に詰まりながらも懸命に話す男の子。狐は前足でちよいちよいと男の子の肩をつついた。

うつむいていた男の子は涙でぐしゃぐしゃになった顔をゆっくりと上げて、狐と目を合わせた。

男の子はさらさらの黒髪に、女の子のような可愛らしい顔をしている。パーカーの袖を噛んで、ぐいと引っ張った狐。そのまま歩き出したので、男の子は慌てて立ち上がった。

狐は木の根っこや雑草に埋もれた切り株を上手に避けて歩いていく。男の子は置いて行かれないように必死に急いだ。



しばらく歩いて、遠くに田んぼや畑が見えるようになった頃。

「いつきー！ どこにいたのー！」

どこからか人の声が出た。

「おかあさんだー！」

男の子はぱっと笑顔になって、声のする方へ走りだした。この子の名前はいつきというらしい。

「おかあさん！ 僕どこにいるよー！」

狐について、生い茂った木々を抜けて、なだらかな道に出る。そこに、男の子のおかあさんはいた。

「いつきー！」

おかあさんは走り寄って男の子を抱き締めた。おとうさんやおばあさんもやってきて、泣いて喜んでいた。

男の子は助けてくれた狐にお礼を言おうと振り返ったが、そこにはもう、誰もいなかった。

男の子は山の中に間違っって入ってしまった、迷子になってしまったらしい。どうやってここまで戻ってきたのかと聞かれ、狐が連れてきてくれたと答えた。

おかあさんは信じなかったようだが、おばあさんは優しく男の子の頭をなでた。

「そうかい。それじゃあ、今度お礼を言いに行かないとねえ」

狐は何を食べるかねえ。木の実でも持っていこうか。と言ったおばあさんに、男の子は「うん！」と笑顔でうなずいた。

「あの狐ね、後ろの右足だけ白かったの。だから、また会えたら僕すぐにわかるよー！」

しかし、男の子が再び狐に会うことは、二度となかったという。

それから二年後の冬。厳しい寒さの中、いつかの狐は震えていた。その年は例年よりも気温が低く、狐の食べ物である木の実も少なかった。狐は木の洞の中、孤独で空腹と寒さに耐えていた。



蓄えておいた木の実も、二日前に食べきってしまい、今日食べるものすらない。このままでは死んでしまおうと考えていた時、狐は小さい頃に死んだ母親の言葉を思い出した。

「狐はね、人に化けられるのよ」

確か、そんなことを言っていた。人になれたら、村へ降りて、食べ物を手に入れられるだろうか。可能性は高くないだろうが、狐のままで村に降りたらしきつと殺されてしまう。このまま山にいても、死んでしまっただけだ。

やってみるしかない。丸くなっていた狐は立ち上がった。

化け方なんて知らないのです、とりあえず目を閉じる。そして、何年か前の春に出会った男の子の顔を思い浮かべた。さらさらの黒髪に女の子のような可愛い顔。白い肌に、丸い目。小さな赤い唇。華奢な体。細かいところまで、懸命に思う出す。

しばらくすると、前の足にちくりと痛みを感じた。ゆっくりと目を開けると、狐のものではない白い肌が目に入る。右足を上げると、それは小さな子供の手になっていて、手のひらの薄い皮ふに小さな小石が刺さっていた。

「痛い……」

痛みに思わず鳴こうとすると、口から言葉がこぼれた。人の言葉も話せる。後ろ足に力を入れると、簡単に立つことが出来た。ちゃんと服も着ている。あの時出会った男の子と同じものだ。薄手のパーカーはとても寒かったけれど、何もないよりはいい。

とにかく、本当に人に化けることが出来たのだ。狐はぴょんと跳ねて叫んだ。

「これで村に降りることが出来る！」

狐は弱った体で、出来る限りの速度で走った。今までとは違って、二本足で。最短距離で村へと出る道を、ひたすらに走った。

生い茂った木々を抜けて、根っこを飛び越えて。途中で何度も転んだけれど、さっきのような痛みはもう感じなかった。

だんだん道がなだらかになってきて、畑のいっぱい並んだ小道に出た。

山の中は薄暗くて気付かなかったが、今は夕方のようなようだ。傾いた太陽が、たった今降りてきた山の向こうに沈もうとしていた。



ここまで来れば、食べ物を見つけれられるかもしれない。狐はふらふらとした足取りで、畑を眺めながら歩いた。

しかし、思ったように狐の食べられそうなものはなかった。畑の野菜もとつくに収穫されてしまって、見える場所には何一つ残っていないかったのだ。

「お腹が空いたな……」

ぽつりと呟いた声は冬の空に吸い込まれていった。寒さに手足もかじかんでいる。

山に帰ろうか、でも、このままでは……。

狐は何度も同じことを考えては、ぶんぶんと首を振った。このまま帰るわけにはいかないのだ。何か、食べるものを探さなければ。狐は畑のそばにある、小さな家の裏に入った。すると、人気のない場所に、段ボールに入れた人参が置かれていた。

見つけた。狐は一本だけ手に取ると、慌てて走り出した。人に見つかる前に山に帰らなければ。

その時だった。

「おい、泥棒だ！ 捕ましろ！」

低い男性の怒鳴り声が後ろから聞こえてきて、たくさんの人が集まってきた。狐は必死に走ったが、子供の体

で体力も底を突いてしまっていては、逃げようもない。すぐに大人達に捕まってしまうた。

「返せ！ それは俺のこの人参だ！」

羽交い締めにされた小さな体は簡単に宙に浮き、人参は取り上げられてしまった。

さらに大人達は、狐を拳で殴ろうとした。

「や、やめて！ 殴らないで！」

狐は叫んだが、とてもやめてもらえそうにはない。怯えてぎゅっと目を閉じた。しかし、拳が狐に当たることはなかった。

「え？」

おどろいた様な声が聞こえて、狐は恐る恐る目を開けた。すると目の前には、大人達が口をぽかんと開けて固まっていた。

「き……狐？」



正体を言い当てられてびくりとする狐。緩んだ大人達の腕からするりと抜けると、頭に手を伸ばした。さらさらの髪に混じって、ふわりとしたものが手に触れた。狐の耳だ。さらに背中の方を見ると、ふわふわの尻尾が生えている。

化けているのがばれた。

とにかく逃げなければと思う狐だが、体は思うように動かない。正気を取り戻したらしい大人達に、また腕を強く掴まれた。

「人じゃねえなら、手加減する必要はねえよな？」

再び握られる拳。その人の目には、確かに殺意がこもっていた。

死ぬ……。狐が全てを諦めようとした時だった。

「ちょっと待っておくれ」

後ろから、しわがれた声が聞こえた。狐は「助けて！」と叫ぼうとしたが、かすれた声しか出ない。じたばたもがく狐をすっと指差して、おばあさんが静かに言った。

「その子は私の孫なんだよ。お願いだから、はなしてやっておくれ」

その言葉に、狐を取り囲んでいた大人達はさっきのようにまたぼかんとした後、大声で笑いだした。

「こいつが孫だって？ もともと頭のおかしいばあさんだと思ってたが、ここまで酷かったとはな！」

「残念だがこいつは化け狐だ。ついでに泥棒狐だぞ」

□々に言う大人達に耳も貸さず、おばあさんは狐の手を引いた。

「いつき、寒かったろう。ごめんね迎えに来るのが遅くなって。さあ、一緒に帰ろうか」

どこまでも自分の孫だと言い張るおばあさんに、大人達はもう何も言わなかった。ぼけたおばあさんに何を言っても無駄だと思ったのだろう。みんなあきれたように肩をすくめて自分の家に帰って行った。

狐はどうすればよいか分からず、おばあさんに手を引かれて歩いた。おばあさんは、家につくまでずっと狐に話しかけていた。

「こんなに遠いところまでよく一人で来たねえ。そんな薄着で寒かったらうに。お腹も空いているだろう？ 早くお家に帰って暖まろうね」



狐は何も言わず、ただうなずいていた。歩いているうちに、耳と尻尾は消えていった。

「さあ、着いたよ。早く中にお入り」

ドアを開けてくれたおばあさんに続いてしゅるりと家の中に入った狐は、どうしたものかと考えていた。

もともとこんなつもりではなかったのだ。村でちょっと食べ物をちようだいで、山へ帰るつもりだった。おばあさんがよそ見をした隙すきに出ているか。でもここにいたら食べ物ももらえるかもしれない。

うつむいて考え込む狐に、おばあさんは言った。

「いつき、スープを温めようと思うんだけど、飲むかい？」

狐は思わずがばっと顔を上げた。二日ぶりの食べ物だ。頭で考える前に声が出ていた。

「飲むー」

勢いよく答えた狐に、おばあさんはにっこりと笑った。

「そう。じゃあ温めているあいだ、ここで待っていてちょうだい。この家にはストーブがないのよ。悪いけど、毛布を被かぶっていてね。後でお洋服も探しましょうか」

おばあさんは狐の頭をなでて台所に入っていた。居間に残り残された狐は、そばに置いてあった毛布に素直にくるまった。なんせ外はとても寒かったのだ。家の中も冷え切っているが、風がないことと毛布があることでだいぶ震えもおさまってきた。少しずつ体も暖まってきた頃、おばあさんが湯気のたったマグカップを持ってきてくれた。

「遅くなってごめんねえ。熱いから、気を付けて飲みなさい」

両手でマグカップを受け取った狐は、ふうふうと息を吹きかけゆっくりと飲んだ。

スープは、じんわりと狐の体を内側から暖めてくれた。お腹が空いていたのもあり、狐はあっという間に全て飲み干してしまった。

「おや、いつき。どうしたんだい」

おばあさんは、カップを手につつむく狐の顔をのぞき込んで、驚いた声を上げた。



青白い頬ほおに、涙が流れていたのだ。暖まって、食べ物ももらえた狐は、ようやく落ち着いたのだろう。一人で人に化けて村に降りてきた不安と、大人達に囲まれた恐怖が今になって襲ってきたようだ。声もなく涙を流し続ける狐を、おばあさんはぎゅっと抱きしめて背中をなでた。

「落ち着いたかい」
しばらく経って泣き止んだ狐に、おばあさんは安心したように微笑ほほえんだ。

「一人で寂しかったねえ。今日からあんたの家はここだよ。ゆっくりするところ」

そして二人は、一緒に晩御飯を食べて、お風呂に入って、温かいお布団にくるまって眠った。

狐がおばあさんと暮らし始めて、一週間ほど経った。おばあさんは、相変わらず狐をいつきと呼んでいる。狐も、最近はおばあちゃんと自分から声をかけるようになっていた。

おばあさんは相当ぼけているらしく、ついさっきのこととも忘れてしまっていたりする。狐がこの家に来た時のことも忘れて、今ではずっと前から一緒に住んでいたように思い込んでいた。

狐も、いつきと呼ばれることに慣れてきたようで、すっかりこの家になじんでいる。

いびつな家族関係に、近所の大人達はひそひそと色んなうわさをたてたけれど、二人は本当の家族のように仲良く暮らしていた。

しかし、一段と寒さが増した日の夜のことだった。

「おばあちゃん、電気消すよ」

狐が布団を敷いて、明かりを消そうとした時、おばあさんが、「狐さん、狐さん」と小さな声で言った。

狐は驚いた。今までいつきと呼んでいたのに、一体どうしたというのだろう。

「どうしたの？ おばあちゃん」

おばあさんの枕元に座って、狐は耳を傾けた。

「ごめんね私のせいで」



おばあさんは突然謝った。「どうして?」と狐がたずねる間もとえずい、おばあさんは独り言のようにぼつりぼつりと話し始めた。

「本当はね、ずっと分かっていたんだよ。あんたが孫じゃないことも、狐だつてことも。ここに連れて帰ってきた日、あんたは尻尾生やしてたしね。でも、どうしても連れて帰リたかったんだよ。ごめんねえ。あんたは山に帰るべきだったのに」

最初に出会った時、おばあさんは狐を孫だと思い込んで家に連れて帰ったわけではなかったのだ。狐だと分かった上で、自分の孫だと大人達に言い張ったのである。固まってしまった狐を前に、おばあさんは寂しそうな顔をしていた。

「私の孫のいつきはね、二年前の春、村のはじっここの山で迷子になったんだよ。すぐに見つかつたけれど、山から一人駆けてきたいつきは、狐に助けてもらつたと言っていた。私以外は誰も信じなかつたがね。今度ここへ来た時、狐さんにお礼を言いに行こうと言っていたんだけど、もういつきがここに来ることはなかつたんだ」

布団に横になっていゝるおばあさんの目から、涙が一筋流れ落ちた。

「その年の秋頃、いつきは両親とまたここへ来ようとした。でも、それは叶かなわなかつた。来る途中で事故にあつたんだよ。三人とも、亡くなつてしまつたんだ」

狐はもういいよ、辛いことは無理に話さなくていいと言おうとしたが、おばあさんは話すのをやめようとはしなかつた。

「信じたくなかつた。また会いに来てくれるとずっと待っていた。だから、いつきと瓜うり二つのあんたを見た時、まさかと思つたんだ。尻尾があつても、可愛い孫をもう一度抱きしめたかつたんだ」

声もなくおばあさんは涙を流している。

「だからね、狐さん。山に帰るなら今のうちだよ。私は明日になったら、今のごとも全部忘れてまたあんたのことをいつきと呼ぶだろう。もうだいぶぼけているからね。いつか自分のことも分からなくなるかもしれない。あんたが人のふりをしてずっと無理にここにゐる必要はないんだよ」



いつの間にか、狐も泣いていた。おばあさんは狐を助けてくれた恩人なのだ。ぼけたおばあさんを、一人で放っておく訳にはいかない。狐は優しいおばあさんが大好きだった。

だから、涙をふいて、にっこりと笑ったのだ。

「おばあちゃん、何を言っているの？ 僕はいつきだよ。事故にあったけれど、僕だけは助かったんだ。心配しなくても、ずっとここにいますよ。おばあちゃんを一人にしたりしないから。だから、笑ってよおばあちゃん」

おばあさんは目を見開いた後、ゆっくりと微笑んだ。

「ありがとうね。私は多分もうそんなに長くは生きられないけれど、その時が来るまでは一緒にいておくれ」

狐は泣きながらもうんとうなずいた。

それから二人は最期の時まで、片時も離れることなく一緒にいたという。優しい狐のお話は、それからずっと、この村に言い伝えられている。

その後狐はどうなったの？ と聞いた幼い私に、おばあさんは少し考えて答えてくれた。

「きつと狐は一人になった後、山に帰ったんじゃない？もしかしたら他の狐を見つけて、子供も出来たかもしれないわね」

それを聞いた私は、取り残された狐は一人ぼっちにはならなかったんだと、安心して笑ったのだった。

懐かしいなあと道端の小石を蹴りながら、私は物思いにふけた。結局一度も狐に会ったことはないの、「大切にしろ」と言われてもどうすればよいのかはいまだに分かっていないけれど。蹴った小石が変な方向に転がったので追いかけていると、黄金色のふわふわしたものが目に映った。

「狐……？」

間違いない。写真でしか見たことないけれど、あれは狐だ。親とはぐれて、村に降りてきてしまったのだろうか。まだ子供のように見える小さな狐は、私がすぐ側にいることに気付いていなかった。

木の実をとろうと背の低い木に向かってぴょんぴょんと跳ねている狐に、私は思わず声をかけた。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「それ、欲しいの？」

子狐はびくりと震えて後ずさりし、私から離れようとした。私は木になっていた小さな実を一つ二つ取って、狐の前に置いてやる。狐はそっと木の実をくわえると、回れ右をして駆け出した。

「気を付けて帰りなよー」

返事はないと分かっているけど、言わずにはいられなかった。

振り返ることなく山の方へ駆けていく狐の右の後ろ足は、靴下を履いたように真っ白だった。